

天南現出日本村——ブラジル国サンパウロ州レジストロ植民地の形成過程と松村栄治関係資料「戸籍簿」

泉水英計[※]

はじめに

ブラジル日系人の大多数はサンパウロ州に居住しているが、州都から内陸部へと続く高原地帯に広がる日系入植地からは離れて、大西洋岸をサントスから南西に約 200 キロメートル下った平野部に一群の日系入植地が開かれている。入植が始まった 1913 年には、リベイラ川河口の港町を中核とするイグアペ郡に属したが、その後、イグアッペ、レジストロ、セッテ・バラスの 3 市にわかれる。とくに後二者は、日系人をぬきに現在の発展は語れない。入植地開設 20 周年を記念する写真帖が刊行されたとき、当時の経営母体であった海外興業株式会社社長は、題辞に「天南現出日本村」と揮毫したが（安中 1934）、文字通り南米大陸で日本人による村建てをしようという野心的な事業であった。

本論は、このイグアッペ入植地の中心となったレジストロ植民地に焦点を当て、その形成過程を解明する糸口を探索するものである。2012 年に同地を訪問した際に、年長者から入植時の様子を聞き書きする機会があった。例えば、同郷者が一緒になって入植し、どこそこの地域は「長野村」と呼ばれていたとか、同じ船で渡伯した家族は入植後も親密な交流をもったというような話である。また、ブラジル国内で嘲笑的な含みをもって名指されるバイーア州出身者に準えて「オキナワ、バイヤーノ」という言い方があったとか、八丈島出身ということで相手の親が結婚に難色を示したという

話もあった。ただし、年長者であっても入植時の話は、幼い頃の断片的な記憶を語っているか、語り継がれた記憶を再話しているのであって、興味を抱いたが、短時間の聞き書きから得られた情報のみで考察を進めることはできなかった。その後、現地で複写した資料を精査したときに、初期の植民地社会を全体的に俯瞰できるような一資料の存在に気付いた。植民地の指導的人物が作成した入植者たちの「戸籍簿」である。以下では、まず、レジストロ植民地開設にいたる経緯を辿りつつその特徴を整理したうえで、この「戸籍簿」を活用することで植民地形成についてどのような展望が開けるか探してみたい。

第一節 レジストロ植民地の特徴と入植の経緯

国策による米作殖民

近代日本の海外移民を概観するならば、まず、明治初年より北米への移民が始まり、大正期を中心にした南米移民がこれに続き、昭和期に入ると大挙して満州へ向かうという変遷がある。南米とりわけブラジルは、北米で強まった日本人排斥に対処するための代替えとなった渡航先であった。集団移民の端緒となった 1908（明治 41）年の笠戸丸移民は日系ブラジル人の集会的な回顧の対象となり、彼らがサントスに入港した 6 月 18 日は現在では「移民の日」として記念されている。

けれども、彼らの祖父母たちの多くは、

※神奈川大学経営学部国際経営学科

必ずしも永住の意思を固めて日本を離れたものではなかった。総数 20 万弱といわれる戦前移民の 8 割を大農場地帯の契約農民（コロノ）が占めていた。20 世紀初頭の奴隷制度廃止と、これを補填するはずだったイタリア移民の中断によって、コーヒー農場は深刻な人手不足に陥っていた。ブラジル政府は、日本からの労働力によりこの問題の打開をはかったのである。契約期限の満了後に残留する者もあったが、多くは、自作農ではなく請負や借地耕作者に転じた。土地購入に躊躇したのは、いずれは帰国するという出稼ぎの意識があったからにほかならない。

この点で特異であったのがイグアッペ郡の入植地である。そこでは、出稼ぎではなく自作農としての定住が当初より計画され、事業母体の民間会社は実質的には国策企業であり、主要作物はコーヒーではなく米であった。これらの 3 点は相互に関連したものであったようだ¹。

同時代に類例のない日本人入植地は、事業の中心人物であった青柳郁太郎の信条にもとづいて形成された。すくなくとも当面の間は労働の代価に賃金を得ようという「移民」と、最初から土地を買って渡航先に落ち着こうという「殖民」との峻別がここでは重要である。ブラジル移民の父が、笠戸丸を率いた水野龍^{りゅう}ならば、植民について同位置を占めるのが青柳であった。青柳は「珈琲移民の送り出しには最後迄反対」、「終始一貫して植民論者だった」と水野は回想している（レジストロ六十年史刊行委員会 1978：1）。1908（明治 41）年に青柳の名で桂太郎首相に提出された意見書は、ブラジル植民の始点として移民史でくり返し言及されることになる。

以下にレジストロ植民地の開設経緯をまとめるにあたり、基本文献は、青柳自身が指揮して刊行した『ブラジルに於ける日本

人発展史』下巻第 1 章（同刊行委員会 1942）と、『レジストロ植民地の六十年』（同刊行委員会 1978）であるが、くわえて、深沢正雪による直近のルポタージュ（深沢 2013-4）は、青柳のバックグラウンドといった既存文献の盲点を含めイグアッペ入植地の歴史を精力的に掘り起こしており、特筆に価する。

さて、青柳は 1859（安政 6）年に千葉県で生まれ、水野と同年であった。1880 年代末にカリフォルニア大学に留学、米国史を鑑に、過剰人口の海外植民を考えていたところ、在外米国領事の報告書を図書館でみつけ、南米殖民の可能性に目を向けたのだという。すでに日本と国交が開けていたペルーが最有望とみて自ら視察旅行に出かけ、地誌紹介『秘魯事情』（1894）を上梓している。実際にその 5 年後、森岡商會がペルーに送り出した 790 人が、南米大陸に向かった最初の日本人集団移民となったが、現地で問題が続出し予期したほどの実績があがらなかった。

実は同じ頃にはブラジルへの移民も準備されたのだが、コーヒー価格が暴落したため、出帆直前に中止を余儀なくされていた（土佐丸事件、1897 年）。しかし、数年のうちに状況が好転し、1905（明治 38）年に赴任した駐伯弁理公使・杉村^{ふかし}濬が、ブラジル側の積極的受け入れ姿勢を日本に伝えるとにわかに話題を呼んだ。同年末には、さっそく水野が渡伯視察、ここに始動したブラジル移民事業は一気に盛んとなる。青柳もこの流れに棹^さした一人であったといえよう。

青柳は、大浦兼武を中心に集った移民事業研究会の一員であった。大浦入閣の好機をとらえ、国策としての海外殖民を建議したのが、先に触れた桂宛意見書である。しかし、外相の反対で閣議決定には至らず、やむなく東京シンデケートという企業組合を設立し事業を開始する。

渡伯した彼は、一箇年半の調査の結果、

最適地としてイグアッペ郡を選定し、1911（明治44）年2月にサンパウロ州知事に請願書を提出した。10年間で5,000家族を入植させるのと引き替えに、官有地15万ヘクタールの無償譲渡とインフラ整備および渡航費償還を求めたものであった。サンパウロ州政府は条例の整備に一箇年を費やし、1912（明治45）年3月、当面は5万ヘクタールに限り、4年間で2,000家族を入植させるという契約が成立する。本格的な事業の見通しが立ったため企業組合は発展的に解消され、事業母体として伯刺西爾拓殖株式会社が創立された。

民間会社ではあったが政府との関係は深い。創立にあたっては桂首相兼外相が高橋是清や渋沢栄一を動かしている。当時の高橋は日銀総裁であり、渋沢は民間経済界の重鎮で早くから移民政策の確立を建議していた。最高顧問には大浦と渋沢、取締役会長に貴族院議院の酒井忠亮、専務取締役役に川田鷹という役員が並んだ。資本金は100万円、株主総会では「大臣の勧誘でもって始まったような仕事」という発言もあり、実質的には国策といってよい事業であった。

『伯刺西爾開拓事業目論見書』には、「第二年度以降本国より直接に農民を植民地に輸送するの必要なきものと想定す」とあり、初年度のみは農家300家族を日本から渡航させるが、以後3年間は毎年500家族を現地で募集して入植させる予定であった。ここで想定されていたのは、コーヒー農場で労働契約を満了した者たちである。しかし、新たな入植地では米作を主要作物とし、開墾地での陸稲から始め、漸次灌漑を整えて水田を拓くという目論見は注目に値する（東京シンデケート n. d.）。

深沢が指摘しているように、入植地を選ぶ際に水田稲作が念頭に置かれていたようだ。海岸山脈に発し大西洋に注ぐリベイル川は全長約470キロメートル、流域には広

大な平野が形成されている。その湿潤で温暖な亜熱帯性気候は稲の育成に適していた。リベイル川流域の開発は、上流で金鉱が発見された16世紀に始まるが、金ブームが去った後に河岸での水稻栽培が盛んとなり、河口の街イグアッペは米の積み出し港として栄えた。自生種がすでに優良品種であったらしく、1911年のトリノ国際産業博覧会では優良米生産の顕彰を受けていた²。

日本での農業経験を活かすのに格好の土地ということになるが、そこにとどまらず、『日本人発展史』は、大浦農商務大臣が、急速な人口増加による本国日本での主食自給率の低下を憂慮していたことに触れ、稲作地帯への入植が彼の意向を受けたものであるかのように述べている。しかし、実際に政府に提出された意見書のなかでは、殖民国策化を緊要とする理由は、国内の人口圧と世界的な人口均衡化の必然性、移民運搬による海運航路の定着、そして移住者による安定した海外市場の形成の4点であり、単純な食糧確保への言及はない（ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会 1943: 3-5）。深沢もとくに注目している関連ではあるが、さらなる論証が待たれる。

入植の経緯

つぎに、既存文献からうかがえる範囲で実際の入植の経緯をみてみよう。伯刺西爾拓殖株式会社が設立されたのは1913（大正2）年3月であるが、サンパウロ州との契約にもとづいた入植が開始されるのは1916（大正5）年8月になってからであった。この間に約3箇年半もの歳月を要しているのは、州有地に点在する私有地の買収と先住者の立退きという問題が測量開始後に浮上したからである。

幸運だったのは、土地整理の遅れを知ったイグアッペ郡会議長の好意により、郡有地1400町歩の無償譲渡を受け、小規模なが

らも先行して入植を始められたことであった。イグアッペ港からリベイラ川を遡り左岸のジュボブラに開かれた植民地には、すでに渡伯していた伯刺西爾拓殖の事務官や農業技師、医師が集められ、期せずして適当なパイロット事業となった。入植者としてはサンパウロ州内陸部の移民たちが期待されたが、応募がなく、サンパウロ市街地に居た脱耕者や職人が呼寄せられる。青柳はこのときも、移民の出稼ぎ志向を非難したが、ブラジルの玄関口であるサントス港まで戻り船便で移動という行程が、恰も隣国への再移民であるかのような感覚を与えたために敬遠されたという『レジストロ植民地の六十年』の解釈がより説得的にみえる。結局、1913（大正2）年11月に30家族が入植し、翌年、桂太郎首相にちなんで桂植民地と命名された。

一方で、レジストロでは私有地の買収が進み、州有地は最終的に9,336町歩の交付を受ける。リベイラ右岸の支流カラピンガ川を挟むように中央環状道路が開削され、道路に沿って第1期分譲150地区が区画割りされた。渡伯直後に使用するための収容所や新住民のための医局も開設される。現地での受け入れ体制の整備と並行して、日本でも1916（大正5）年5月に殖民の募集が開始されるが、この年の入植は先行移民からの16家族にとどまった。

日本での募集活動は芳しくなかった。第1回は300家族を上限に設定していたが、応募は僅かに4家族にとどまった。それでも翌1917（大正6）年には広報に力を入れて二回目の募集活動が展開され、22家族の応募があり、漸次改善されて年末までに100家族が日本を離れた。

同年の入植は、1月に最初の4家族が到着し、8月に22家族、12月には更に21家族がレジストロに着いた。先行移民も、十数家族が勧誘されて植民地の住民となってい

る。この年、サンパウロからリベイラ川上流へ向かう鉄道ジュキア線が開通し、イグアッペ港経由の船旅よりもアクセスが良くなっていた。続く2箇年の間は続々と入植者が到着し、1919年末までに544地区に約400家族が落ち着き、レジストロ植民地はほぼ完成したその姿を現わす。

この間に経営組織のうえでは大きな変革が進んでいた。政府主導による移民会社の合同である。1917（大正6）年12月、移民事業を一括して取り扱うために、資本金900万円の海外興業株式会社が設立され、伯刺西爾拓殖も1919（大正8）年4月に吸収合併された。植民地経営が移民事業の片手間になることに不安を抱いた青柳は合併に反対したが、初期の殖民募集の低迷に困惑し政府援助を嘆願した手前、政府提案を頑強に拒むことは難しかったようだ。とは言え、青柳を含め伯刺西爾拓殖時代の現地スタッフに異動はなく、むしろ、規模を拡大した親会社により、精米所や分蜜糖工場、直営農場、ジュキアからの車道などの産業基盤の整備が急速に進んだ。その後も海外興業はレジストロ周辺で事業を拡大し、セッテ・バラス（1920年）、キロンボ（1927年）、ジュキア（1932年）の各植民地が開かれる。

第二節 松村栄治関係資料による検討

松村栄治と「戸籍簿」

レジストロ植民地では、1916（大正5）年に入植が開始され、翌年からの3箇年間に第一世代の植民地が形成されたことをみた。しかし、冒頭で紹介したような入植の語りを検証するには、既存の文献から得られる以上に詳細な情報が必要である。どの家族が何時どの区画に入植したのか。その家族の出身地はどこで、渡伯した移送船ではどの家族と一緒にだったのか。これらの具体的な情報がある程度まとめて与えてくれるの

が、現地に残された「戸籍簿」と呼ばれる資料である。

松村昌和氏から提供されたこの資料は、御尊父の栄治氏が作成したものである。松村栄治はレジストロ第1回殖民として渡伯し、レジストロ郷助役を経て、1935（昭和10）年にレジストロ郷司、39年からイグアペ共済会レジストロ連合会長、戦後も55-6年に共済会会長を歴任した植民地の名士であった。また、この間、一旦帰国上京し殖民者代表として海外興業との折衝にあたり、帰路には第35回移殖殖民の監督として渡伯船を率いた。

国立国会図書館憲政資料室には「松村栄治関係資料」と呼ばれる資料群がある。1985年に本人から寄贈された1920年から50年のレジストロ植民地関係資料で、分量は20項目0.1ファイルメーターほどになる。しかし、「戸籍簿」はこの資料群には含まれていない。「戸籍簿」の体裁は、「伯刺西爾拓殖株式会社 イグアペ植民地」と印刷された罫紙を折り重ねたもので、手書きで頁付け



図1 「戸籍簿」の記載例

され、最終頁は604頁である。ただし、途中に頁番号の脱落があり、実際には483頁分しかない³。基本的に一つの頁に一つの地区に入植した一家族の情報が記載されている。村松栄治氏の場合を例にみてみよう。

図1に示したように、冒頭に、渡伯に利用した船舶名と戸主の本籍地とを記した後、旅券番号、家族関係、氏名、生年月日など家族構成員個々の情報を記載する。さらに、「取扱人別」および「神戸出航、サントス着、植民地着年月日」という項目も設けられているが、家族単位で移動したからみな同内容となり、記入例は少ない。上部の欄外には、現住所にあたる分譲区画（地区番号）が記され、その土地の入植契約が結ばれた年月日が記録されている。住民票や戸籍と同様に、後に出生した家族を追記していく書式であることにも注意したい。

これによると、松村栄治は明治27年11月8日に、長野県北安曇郡美麻村10976番地戸主の亀吉の二男として出生、第2回かわち丸にて大正6年6月12日に神戸を出航し、同年8月9日にサントス入港、レジストロには10日後の19日に到着している。第89号地区の分譲を購入し、到着の11日後に契約が結ばれている。妻と甥をともなった渡伯で、当初は3名の所帯であったことがわかる。その後に男子1名と女子4名が生まれたが、三女は夭折している。同伴した甥も入植地で妻帯し4人の子供をもっている。昭和10年には2世帯12名が暮らしていたとみてよいだろう。

「戸籍簿」の他の頁では、必ずしもこのように各項目が充当されてはいない。個別的に他の資料を探したり、親類縁者の面談によって情報を補ったりする必要があるだろう。ここでは家長以外の家族構成員や併記された別世帯を割愛し、全体の見通しを得るための情報として附表「松村栄治作成レジストロ植民地『戸籍簿』」を提示しておく。

移殖民送出道府県

さて、本論の冒頭で触れた植民地形成期の記憶の一つに、隣接した区画に同郷者同士で入植したという語りがあった。その際に「長野村」という言い方がされたように、おもに道府県が同郷の単位と認識されていたようである。以下では、付表の「戸籍簿」の分析から、まずこの語りを検証してみたい。

はじめに概要を示せば、レジストロ入植者の出身県は33県に及ぶ。出身者が見当たらないのは、青森、岩手、宮城、栃木、群馬、埼玉、山梨、神奈川、京都、大阪、鳥取、徳島、大分、宮崎の14県である。これに送出者の少ない府県を加えると、次のような地方別の偏りが浮かび上がる。

東北地方－福島(13家族)を除いて少ない(山形5、秋田4家族)

関東地方－東京を除いて少ない(千葉1、茨城2家族)

中部地方－静岡だけ少ない(3家族)

北陸地方－県により違う(富山1、福井2家族)

近畿地方－全般的に少ない(滋賀1、兵庫3、奈良3、三重3家族)

中国地方－日本海側が少ない(島根1家族)

四国地方－比較的少ない(香川2、高知2家族)

九州地方－県により違う(長崎1、佐賀1家族)

これらに含まれない沖縄県と北海道は入植者の送出が多いが、突出して多いのは長野県である。これらとあわせ上位8位までは次のようになる。

長野県	131 家族	熊本県	36 家族
沖縄県	56 家族	石川県	19 家族
北海道	49 家族	福岡県	19 家族
東京府	46 家族	広島県	17 家族

ここにみられる傾向はブラジル移殖民全

体のなかでどのように位置づけられるのであろうか。鈴木悌一が指揮した社会調査の報告(ブラジル日系人実態調査委員会 1964)と比較してみよう。ブラジル移民50周年記念事業の一つとして、戦前移殖民約6万7000家族を対象に調査員6000名を動員した大規模な調査である。全体の傾向として、道府県により送出者数に極端な偏りがみられること、北海道と福島を除くと南西日本の出身者が目立つという結果はレジストロの状況と概ね一致している。

興味深いのは、調査データの歴史的分析を担当した竹内利美の、1924(大正13)年を境にして送出道府県が変化したという指摘である。この年日本政府が渡航費の全額補助を開始した。このように完全な国策事業となって以降はすべての道府県から移殖民が送出されるようになる。しかし、それ以前、人々が移民会社の募集に自主的に応じていた時代には、一部の道府県のみが送出を続けた。竹内があげるのは、沖縄、福岡、熊本、広島、鹿児島県の5県で、この上位5県で過半数の移殖民を送出していたという(ブラジル日系人実態調査委員会 1964: 231-234)。レジストロ植民地の形成は、国策化以前の時代であり、たしかに、送出上位県もほぼ竹内の指摘と一致している。彼のいうように、「各県の移殖民送出の歴史的條件」が深く関与していたことは間違いないだろう。

彼が将来の課題としたこの問題へのアプローチとして、レジストロとの比較対照から浮かび上がる論点を整理しておこう。

(1) 竹内は国策化を境に移殖民送出者順位が急上昇した道府県に北海道を含めている。しかし、レジストロ植民地形成期の入植者には北海道出身者が多い。換言すれば、レジストロの北海道出身者は、この時期のブラジル日系社会では比較的珍しい存在であった。ブラジル移民開始の1908(明治41)年は本土から北海道への移住のピークであ

り、北海道への人の流入は飽和点を迎えたといわれるが（ブラジル日系人実態調査委員会 1964: 226）、すでに移住した人々の再移住という流れまで生んでいたことがわかる。その際には単なる労働力移民ではなく、北海道での開拓の経験に裏付けられた殖民を志向したと解釈できるのではないだろうか。

（2）竹内によれば、反対に多くの移植民を送出していたのに、国策化以後は送出が低調になったのが長野県である。レジストロの状況と矛盾するわけではないが、長野県人の突出した入植数には特別な説明が必要となろう。1925（大正 14）年に信濃海外協会によるアリアンサ植民地の開設があり、中軸になったのはレジストロにいた長野県人の輪湖俊午郎と北原地佃蔵であった。このことも考慮すると、レジストロを舞台にした長野県人脈は、移民送出の解明に重要な鍵となるとかんがえられる。

（3）竹内は、国策化以降の時期に「東京、大阪、愛知などが比較的多く移民を送っているのは、非農業者の移民の増大と関連する」とみている（ブラジル日系人実態調査

委員会 1964: 233）。この観点からは、レジストロ入植時点での東京府出身者の多さに疑問が生じるが、「戸籍簿」をより詳細にみるならば、その多くは実は八丈島出身者である。同島からの殖民は東京府出身 46 家族中の 31 家族にのぼり、この他に小笠原の 3 家族、伊豆大島の 1 家族が統計上は東京府に含まれているのである。「各県内の移民送出の歴史的条件」を考える際には、このような道府県内の地域的な差異にも注意が必要となろう。

同郷者の集住

つぎに、同郷者が隣接区画へ入植したという記憶の語りを検討してみる。この作業に用いた地図「Mappa Da Colonia Registro」の原図には各分譲区画の番号と契約者である家長の氏名が記されている。発行元は海外興業であるから、レジストロ植民地の経営が同株式会社に移管された 1919 年以降の状態を示しているのは間違いない。これに先立った転出と区画再売買の結果、植民地形成時の家長を示す「戸籍簿」とは異同が

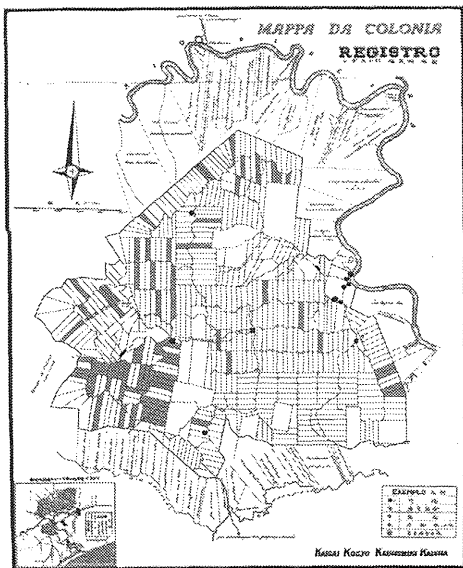


図 2 長野県出身家族の入植状況

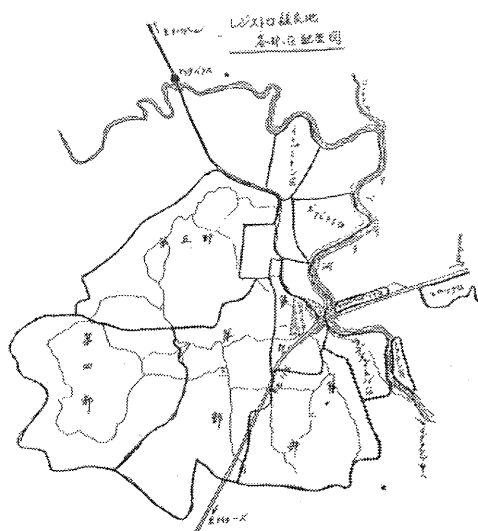


図 3 各分譲区配置図（『レジストロ植民地の六十年』より）

生じているが、区画番号を頼りにして入植時の地理的状況の再現を試みた。ただし、そもそも「戸籍簿」上の契約区画欄が空白である場合が多く、以下の上位5府県の再現は不完全なものであることを断っておく。

図2は、「戸籍簿」により契約区画が判明した長野県出身家族の入植状況を示している。植民地の南西部に明らかな集住が認められる。図3に示したように植民地全体は5つの部区分から構成され、南西のこの一帯は第4部に相当する。「4部は長野村」という語りは実際にその通りであることが確認できよう。

先に触れた松村栄治も長野県出身であるが、入植地は南東端の第2部である。入植の時期が早かったため、先に分譲されたこの地区に落ち着いたとかがえられる。

図4は北海道出身家族の入植状況を、図5は東京府のうち八丈島出身家族の入植状況を示す。植民地北東部に寄った偏りがみとめられる。ここは第5部に相当し、分譲の時期と渡航の時期との相関が予想される。

熊本県（図6）や沖縄県（図7）の出身家

族にもある程度の偏りが認められるが、北海道や八丈島とは対照的に植民地中央部に寄っている。やはり分譲と渡航の時期に関係しているとかんがえられる。

以上、「戸籍簿」から再現される植民地形成過程の一例として同郷者の集住をみた。

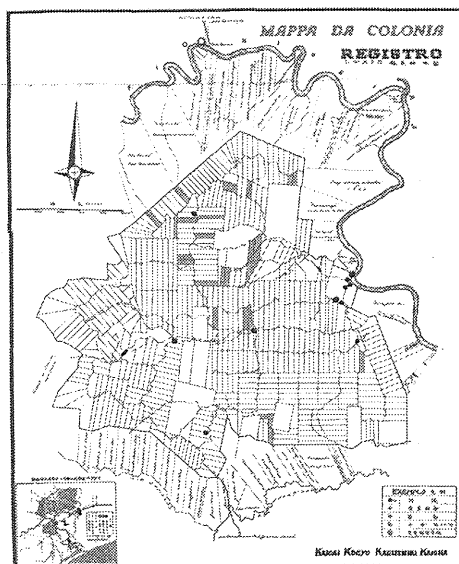


図5 八丈島出身家族の入植状況

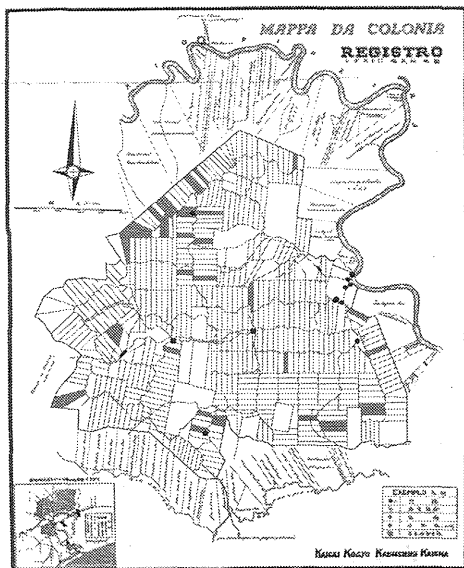


図4 北海道出身家族の入植状況

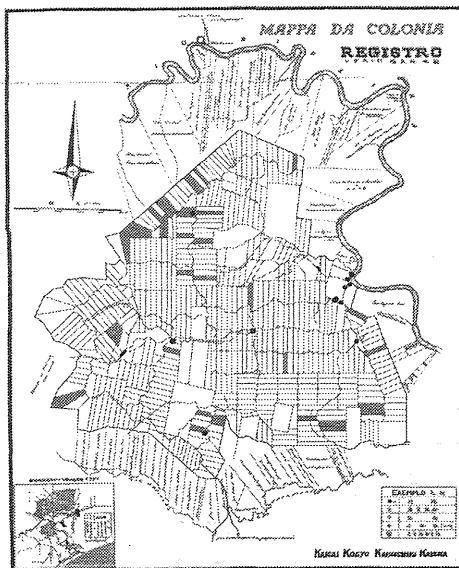


図6 熊本県出身家族の入植状況

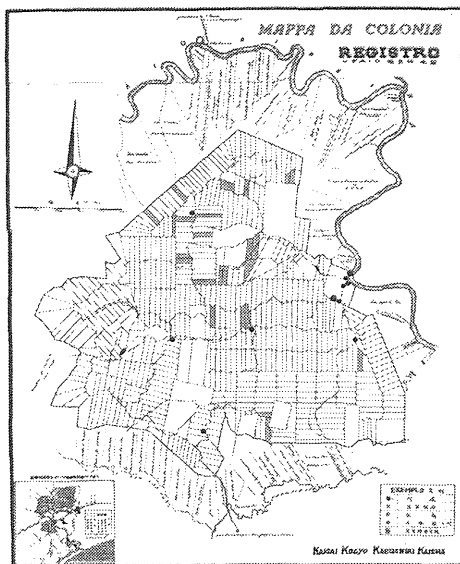


図7 沖縄県出身家族の入植状況

有効な事例数が少ないために不完全ではあるが、隣接区画への同郷者の入植という傾向は確認できたといっていよう。「戸籍簿」の情報の不備は、現住者に情報提供を求めることで補完される可能性が高く、そのうえで再検証を試みれば、より確かな裏付けを得るはずだ。一方、「戸籍簿」には入植区画番号とともに契約年月日の記録があり、植民地内各部の分譲開始期日が判明すれば、両者の相関関係から集住が起こった地理的位置について適確な説明を導くことができそうである。

むすびにかえて

本論では、レジストロ植民地の形成過程の解明を念頭に、語られたその記憶を検証し補完するのに有効な資料として、現地に残された「戸籍簿」とよばれる記録を紹介し、これを活用した作業の一端を示した。ここでは扱えなかった植民地形成の語り二点について、このような作業を拡張していく見通しを述べて本論のむすびにかえたい。

ひとつは、渡航船同乗者の結束をいう語り

である。同じ希望と同じ不安を抱えて2箇月近い船旅を共に過ごした「同航」あるいは「同船」といわれる人々の仲間意識の強さは「同郷」に等しいともいわれる（ブラジル日本移民百年史編纂委員会 2008：22）。移民監督を務めた松村栄治が、「図南倶楽部」という啓蒙団体に同乗者を組織したのは、そのような紐帯が具現したものであろう（第35回移植民図南倶楽部 1924）。この関係は入植地形成にどのように反映されるのか。興味深い問題であるが、「戸籍簿」の渡航船情報は検証に使うには不完全なものであった。さらに渡航船の記録（ブラジル日本移民資料館 2011）と照合してみると、誤記とおもわれるものも複数見つかった。ただし、家長氏名が正しければ、乗船者名簿との照合により確実に訂正ができる。直近に取り組む作業としたい。

もう一つは、沖縄県出身者に対する差別である。近代初期の例えばハワイ日系移民の間では、文化的差異とくに言語障壁により沖縄出身者と本土出身者の間には心理的距離があったことが知られている。しかし、レジストロ入植が開始された大正期までには沖縄県でも日本の教育制度が確立され、そのような障壁は相対的に小さかったはずである。入植地区の地理的状况をみても他府県出身家族と離れていた形跡はない。

しかし、一方で、第二次大戦により帰国の可能性が消えたと信じられるまでは、日本に戻ったときに風俗習慣の違いが家庭生活に問題を起すことを危惧して、沖縄人との通婚は望まれなかったという語りがあった。この点を検証するには、「戸籍簿」の家長以外の家族構成員の情報を有効に活用できる。植民地で育った子供たちはどこから配偶者を得たのか、植民地内の通婚はどの程度の比率だったのか、あるいは婚出や転出の状況はどのようであったか。松村の記録には粗密があり、これらの問いに取り組

むにも補足情報の収集が不可欠である。

とはいえ戦前のレジストロ植民地の社会を理解するうえで、「戸籍簿」が希有な基礎資料であることに間違いはない。慎重に情報を修正し拡充していく作業がのぞまれる。

付表 松村栄治作成レジストロ植民地「戸籍簿」

頁	出身地	家長氏名	渡航船名	入植地区	契約年月日
1	長野	浅川正男	さぬき丸 14 回	383	＝
3	長野	青木忠太郎	はかた丸 9 回	422	T7.10.24
4	長野	宮沢久和吉	しあとる丸 8 回	320	T7.9.12
5	熊本	荒崎米記	●●丸 5 回	337	T8.1.13
6	長野	大室助治	しあとる丸 8 回	398	T7.9.23
7	長野	秋山孝市郎	はわい丸 7 回	323	T7.7.2
8	熊本	荒崎進	＝	43	T8.1.13
9	沖縄	山内盛清	わかさ丸 5 回	195	T7.5.11
10	長野	宮下延太郎	はわい丸 7 回	278	T7.6.13
11	北海道	天谷拾吉	さぬき丸 14 回	162	＝
12	長野	那須野喜平治	さぬき丸 14 回	328	＝
14	北海道	川村庄之郎	さぬき丸 14 回	509	T12.1.21
15	東京(八)	浅沼松一	●●丸 13 回	476	＝
16	長野	青柳新治	はわい丸 7 回	321	T7.7.29
17	沖縄	運天政行	しあとる丸 6 回	＝	＝
18	東京(八)	浅沼傳一郎	かまくら丸 15 回	492	＝
19	福岡	中願寺熊太	さぬき丸●回	＝	＝
20	東京	浅沼丈夫	はわい丸 16 回	469	＝
22	沖縄	新垣武文	しあとる丸 3 回	110	T6.10.2
23	沖縄	新垣盛正	しあとる丸 3 回	28	T6.9.29
24	鹿児島	阿久根金之助	＝	86	T5.9.21
25	沖縄	赤嶺藩	しあとる丸 3 回	31	T6.9.29
26	沖縄	新垣信道	はわい丸 7 回	188	T7.7.15
27	長野	馬場清治	さぬき丸 10 回	＝	＝
28	沖縄	安里昌加	たこま丸 4 回	206	T6.12.22
29	福岡	青木新次郎	＝	233	T7.1.4
30	長野	浅野利實	さぬき丸 14 回	＝	＝
31	長野	土井吉助	しあとる丸 8 回	428	T7.10.2
32	長野	大工原佳郎	はかた丸 9 回	432	T7.10.26
33	沖縄	新垣嘉味	はわい丸 7 回	298	T7.6.11
34	岡山	大野長一	＝	139	T6.5.11
34	岡山	大野長一	＝	137	T8.11.1
34	岡山	大野長一	＝	141	T8.11.1
35	山口	野村隆輔	しあとる丸 3 回	＝	＝
36	滋賀	益田克己	＝	＝	＝
37	兵庫	土井万七	ふしみ丸 1 回	131	T6.6.13
38	沖縄	新垣袋信	はわい丸 7 回	59	T7.8.26

39	北海道	伴基	わかさ丸 12 回	444	＝
40	沖縄	江洲亀	わかさ丸 5 回	223	T8.5.29
41	福島	遠藤齊彦	かまくら丸 15 回	84	＝
42	n/a	Casimira Silva	＝	14	T6.9.8
43	沖縄	知念幸加	わかさ丸 5 回	263	T7.2.11
44	福岡	青木ノ吉	わかさ丸 2 回	248	T7.1.4
45	新潟	眞保善次	かまくら丸 15 回	191	＝
46	長野	有賀徳次	さぬき丸 17 回	552	＝
47	福岡	青木重登	さぬき丸 10 回	＝	＝
48	長野	藤沢房吉	はわい丸 7 回	325	T7.7.2
49	長野	藤原満寿門	はわい丸 7 回	279	T7.6.11
49	長野	藤原満寿門	はわい丸 7 回	283	T7.6.11
50	長野	深沢深一	しあとる丸 8 回	393	T7.9.21
50	長野	深沢深一	しあとる丸 8 回	394	T7.9.21
51	岐阜	藤井儀市	しあとる丸 8 回	111	T7.8.24
51	岐阜	藤井儀市	しあとる丸 8 回	113	T7.8.24
52	広島	藤沢一巳	わかさ丸 12 回	518	T8.4.21
53	熊本	藤岡竹次郎	とさ丸 19 回	SB	＝
54	沖縄	城間三良	しあとる丸 3 回	144	T6.10.11
55	沖縄	城間加那	たこま丸 4 回	232	T6.12.31
56	沖縄	城間久栄	たこま丸 4 回	29	T6.12.10
57	沖縄	源河千助	わかさ丸 5 回	252	T7.3.29
58	鹿児島	後藤季熊	はわい丸●回	＝	＝
59	福岡	羽高権蔵	＝	69	T7.7.19
59	福岡	羽高権蔵	＝	287	＝
60	広島	平口六三郎	＝	143	T6.6.11
61	愛知	服部興三郎	＝	16	T5.9.10
61	愛知	服部興三郎	＝	8	T7.8.2
62	愛知	堀田勝三郎	たこま丸 4 回	219	T7.5.7
63	石川	広岡金作	わかさ丸 5 回	55	T7.4.19
64	沖縄	外間政春	しあとる丸 6 回	56	T7.2.28
65	沖縄	比嘉藩	しあとる丸 7 回	73	T7.2.25
66	長野	平出二郎	はわい丸 7 回	315	T7.6.26
67	熊本	林田重松	わかさ丸 2 回 東洋	＝	＝
67	熊本	浜田勝治	わかさ丸 2 回 東洋	＝	＝
68	福島	堀川齊助	わかさ丸 3 回 東	96	＝
69	福岡	平川半五郎	＝	140	＝
70	熊本	堀田重造	＝	168	T7.11.16
71	福岡	平田繁太郎	＝	234	T7.12.7
72	長野	花岡賢	さぬき丸 10 回	349	T7.11.21
73	長野	林今朝士	さぬき丸 14 回	310	＝
74	東京	八田牛作	さぬき丸 14 回	529	＝
75	北海道	日南田文七	さぬき丸 14 回	501	＝
76	北海道	箱山五郎	さぬき丸 14 回	559	＝
77	北海道	橋本興一郎	かまくら丸 15 回	406	＝
78	長野	堀内友次	さぬき丸 17 回	505	＝
79	秋田	橋本留治	かまくら丸 18 回	186	＝
80	東京	楠浦文藏	とさ丸 28 回	531	＝
83	石川	平野元義	しかご丸 28 回	290	＝

84	北海道	石川貞治	とさ丸 19 回	446	＝
85	広島	石川亀三郎	＝	2	T5.9.7
86	広島	生森源二	しあとの丸 3 回	138	T6.10.4
87	広島	石崎善四郎	しあとの丸 3 回	19	T6.10.3
88	東京	茨城友次郎	＝	146	T6.11.1
89	熊本	磯崎貞彦	＝	＝	＝
90	沖縄	伊敷蒲戸	はわい丸 7 回	387	T7.6.7
91	沖縄	石原春幸	はわい丸 7 回	367	T7.6.7
92	長野	石川忠ヨシ	しあとの丸 8 回	303	T7.9.12
93	福岡	出利葉政次	＝	203	T7.8.20
94	石川	国沢栄太郎	さぬき丸 10 回	420	T7.11.23
95	石川	池田辰二郎	さぬき丸 10 回	435	T7.12.4
96	長野	伊藤喜太郎	さぬき丸 10 回	300	T7.11.21
97	北海道	池森福弥	わかさ丸 12 回	523	T8.4.25
98	長野	伊藤嘉久三	はかた丸 13 回	470	＝
99	北海道	泉谷由弘	はかた丸 13 回	453	＝
100	長野	市科学治	さぬき丸 14 回	528	＝
101	長野	伊藤長喜	さぬき丸 14 回	382	＝
102	長野	市川又太郎	かまくら丸 15 回	419	＝
103	長野	井之浦多吉	かまくら丸 15 回	517	＝
104	東京(八)	石野岩松	かまくら丸 15 回	506	＝
105	沖縄	知念加那助	しあとの丸 6 回	75	T7.2.12
106	長野	池上熊次郎	さぬき丸 14 回	784	＝
107	長野	伊藤重彦	はわい丸 16 回	546	＝
108	長野	飯島義政	はわい丸 16 回	295	＝
109	岐阜	井戸末次郎	しかご丸 28 回	261	＝
110	長野	猪俣久美	かながわ丸 29 回	479	＝
111	北海道	伊藤吉郎	はわい丸 16 回	270	＝
112	山口	国行卯一	いつくしま丸 3 回	11	T6.6.22
112	山口	国行卯一	いつくしま丸 3 回	13	T7.9.26
113	岡山	熊代九左エ門	わかさ丸 2 回 東	129	T6.6.1
114	熊本	黒田興太郎	＝	123	T6.7.9
115	鹿児島	上村源一	ふしみ丸 1 回	＝	＝
116	北海道	早崎茂吉	かまくら丸 15 回	271	＝
117	福岡	平田新一	＝	205	＝
118	長野	長谷川小一郎	はわい丸 16 回	484	＝
119	島根	原栄蔵	はわい丸 16 回	539	＝
120	広島	桧高正夫	さぬき丸 17 回	293	＝
121	東京	北島研三	＝	109	＝
122	東京(小)	小宮山亮一	かまくら丸 15 回	184	＝
123	秋田	尾山亀吉	＝	＝	＝
124	福岡	芥川為治	ていこく丸 6 回	179	T7.11.16
125	沖縄	新垣三良	わかさ丸 4 回	264	T7.2.18
126	北海道	白鳥英助	＝	＝	＝
127	東京(八)	浅沼勇松	とさ丸 19 回	519	＝
128	福岡	青木新作	＝	247	T7.1.4
129	長野	大工原宗一郎	はかた丸 9 回	430	T7.10.28
130	東京(八)	浅沼敏男	とさ丸 19 回	454	＝
131	熊本	深町信一	＝	12	T5.9.17

131	熊本	深町信一	＝	10	T6.8.12
132	北海道	永澤堅一	さぬき丸 14 回	515	＝
133	北海道	中田末吉	さぬき丸 14 回	403	＝
134	北海道	中村政一	さぬき丸 14 回	513	T11.9.29
135	長野	中村義弥	さぬき丸 14 回	458	＝
136	長野	中島省三	さぬき丸 14 回	527	＝
137	茨城	長山廣	しあとの丸 8 回	117	T8.4.4
138	長野	中城静恵	さぬき丸 14 回	377	＝
139	長野	中島幸吉	さぬき丸 14 回	329	＝
140	長野	西村鍵重郎	さぬき丸 14 回	386	＝
141	北海道	西島茂松	わかさ丸 12 回	522	T8.5.1
142	佐賀	仁戸田庸吉郎	わかさ丸 12 回	514	T8.4.26
143	東京(八)	長井次五八	はかた丸 13 回	228	＝
144	長野	中曽根平四郎	さぬき丸 10 回	463	＝
145	長野	堀内みつ	さぬき丸 10 回	434	T7.12.7
146	長野	楢本栄三郎	さぬき丸 10 回	326	T7.11.20
147	長野	長沢信家	さぬき丸 10 回	351	T7.11.21
148	三重	中山義蔵	さぬき丸 10 回	423	T8.2.3
149	愛媛	中矢勝一	第二うんかい丸 4 回	105	T6.6.11
150	鹿児島	中村宰吉	＝	116	T6.6.11
150	鹿児島	中村宰吉	＝	114	T6.8.15
151	熊本	中尾秀熊	＝	18	T5.9.30
152	福岡	溝上松太郎	＝	22	T5.9.30
153	福岡	永利斎蔵	＝	15	T5.9.30
154	沖縄	野原亀太	しあとの丸 3 回	30	T6.6.29
155	沖縄	仲村渠徳永	しあとの丸 3 回	82	T6.10.15
156	沖縄	仲村渠常晴	しあとの丸 3 回	133	T6.10.3
157	長野	永井覺市	たこま丸 4 回	306	T7.5.22
158	沖縄	仲座蔵之助	たこま丸 4 回	204	T6.12.22
159	沖縄	野原屋眞	わかさ丸 5 回	194	T7.3.13
200	新潟	難波藤一郎	はわい丸 7 回	353	T7.6.20
201	沖縄	仲本牛	はわい丸 7 回	391	T7.6.7
202	愛媛	永田錦司	はわい丸 7 回	355	T7.7.16
203	長野	中島貞雄	しあとの丸 8 回	365	T7.9.21
204	長野	中島川佐	しあとの丸 8 回	433	T7.10.29
205	長野	青木半次	かまくら丸 15 回	93	＝
206	福井	西川忠兵衛	ていこく丸 5 回	165	T11.11.19
207	長野	中沢広元	しあとの丸 8 回	375	T7.9.10
208	愛知	古内衷得	しあとの丸 3 回	51	T6.10.25
209	熊本	福田長四郎	わかさ丸 4 回 東	174	T6.11.2
210	熊本	福田貞次	わかさ丸 4 回 東	122	T6.11.2
211	愛知	松井玄鳳	はかた丸 13 回	479	＝
211	愛知	松井玄鳳	はかた丸 13 回	480	＝
212	東京(八)	村上千代三郎	はかた丸 13 回	491	＝
213	富山	松下清治	さぬき丸 14 回	222	＝
213	長野	宮下丑蔵	さぬき丸 14 回	275	＝
214	北海道	前田友市	さぬき丸 14 回	＝	＝
215	北海道	松原英悟	さぬき丸 14 回	558	＝
216	長野	松沢百	かまくら丸 15 回	94	＝

217	和歌山	森磯平	かまくら丸 15 回	＝	＝
218	広島	水本仁太郎	いつくしま丸 3 回	178	＝
219	＝	宮本文作	＝	＝	＝
220	長野	前田治三郎	かまくら丸 15 回	66	＝
221	兵庫	馬場留四郎	＝	127	T6.9.25
222	長野	村澤和一	かまくら丸 15 回	449	＝
223	北海道	前田慶次郎	かまくら丸 15 回	396	＝
224	北海道	前田伊助	かまくら丸 15 回	198	＝
225	北海道	前田重太郎	かまくら丸 15 回	273	＝
226	石川	松本常	とさ丸 19 回	362	＝
227	北海道	前塚権之助	かわち丸 20 回	1	＝
228	鹿児島	松本盛綱	はかた丸●回	＝	＝
229	長野	牧内忠	しかご丸 28 回	148	＝
230	和歌山	宮本好藏	しかご丸 28 回	563	＝
231	岡山	守屋多賀一	はわい丸 7 回	354	T7.7.16
232	長野	村田政勝	はわい丸 7 回	314	T7.6.26
233	長野	松橋久弥	はわい丸 7 回	421	T7.10.5
234	長野	渋谷初	はわい丸 7 回	115	T7.8.23
234	長野	丸山為治	はわい丸 7 回	115	T7.8.23
235	熊本	前淵勝治	第二うんかい丸 4 回	41	T7.10.8
236	長野	杉林米治	しあとる丸 8 回	291	T7.9.17
237	長野	曲尾良雄	しあとる丸 8 回	416	T7.10.11
238	長野	曲尾真琴	しあとる丸 8 回	415	T7.10.11
239	長野	水上広太	しあとる丸 8 回	330	T7.9.23
240	岡山	光井定次郎	＝	＝	＝
241	長野	粟野原山平	しあとる丸 8 回	348	T7.9.23
242	熊本	丸山数馬	いつくしま丸 3 回	38	T7.10.8
242	熊本	丸山数馬	いつくしま丸 3 回	40	T7.10.8
243	香川	村本重平	＝	166	T7.11.19
244	長野	松本覚次	さぬき丸 10 回	305	T8.1.21
245	石川	村中次正	さぬき丸 10 回	284	T7.11.22
246	石川	九十佐久磨	さぬき丸 10 回	466	＝
248	長野	村岡信	さぬき丸 10 回	467	＝
250	長野	翠川半之助	さぬき丸 10 回	426	T7.12.7
251	長野	南沢亀之丞	さぬき丸 10 回	424	T7.12.7
252	長野	南沢増清	＝	＝	＝
253	東京(八)	村上直三郎	はかた丸 13 回	705	＝
254	沖縄	奥間政行	たこま丸 4 回	33	T6.12.10
255	愛知	大鹿慶太郎	しあとる丸 3 回	155	T6.10.25
256	鹿児島	大原重二	＝	156	＝
257	東京	西澤為藏	＝	＝	＝
258	福島	長澤伊三郎	わかさ丸 4 回	＝	＝
259	山形	長橋熊次	かまくら丸 18 回	224	＝
260	長野	中島源吾	かまくら丸 18 回	554	＝
261	高知	野口勝士	さぬき丸 17 回	182	＝
262	山口	西岡義作	さぬき丸 17 回	170	＝
263	愛知	野村一之助	はわい丸 16 回	60	＝
264	北海道	中岡種三	かまくら丸 15 回	180	＝
265	北海道	中岡菊雄	かまくら丸 15 回	182	＝

266	長野	中村芳美	かまくら丸 15 回	449	＝
267	長野	野上忠行	かまくら丸 15 回	540	＝
268	東京(八)	尾島曹平	はかた丸 13 回	488	＝
269	奈良	岡本寅藏	はかた丸 13 回	189	T8.4.22
270	北海道	大野加一	さぬき丸 14 回	510	＝
271	長野	大峽エツ	さぬき丸 14 回	526	＝
272	熊本	奥村勝巳	＝	29	T7.10.8
273	福岡	小山伴造	＝	237	＝
274	長野	大日方亀惣	しあとる丸 8 回	334	T7.9.12
275	長野	大谷政信	はくらい丸 7 回	420	T8.1.9
276	長野	太田政弥	はくらい丸 7 回	301	T7.7.27
277	広島	尾辻加一郎	＝	＝	＝
278	沖縄	大城亀	しあとる丸 6 回	390	T7.5.13
279	新潟	太田鋭策	はくらい丸 7 回	342	T7.6.17
280	沖縄	大城善平	わかさ丸 5 回	251	T7.2.9
300	＝	山本タツノ	＝	＝	＝
301	沖縄	親泊朝加	しあとる丸 6 回	72	T7.3.4
302	東京(八)	大澤市太郎	とさ丸 19 回	412	＝
303	東京(八)	沖山弥太郎	とさ丸 19 回	494	＝
304	東京(八)	大澤庄五郎	とさ丸 19 回	445	＝
305	熊本	大賀正人	さぬき丸 17 回	SB	＝
306	長野	大平安	はわい丸 16 回	55	＝
307	東京(八)	奥山幸三郎	はわい丸 16 回	76	＝
308	秋田	小笠原倉吉	さぬき丸 17 回	187	＝
309	東京(八)	菊池與惣兵衛	さぬき丸 17 回	312	＝
310	長野	小笠原秀雄	はわい丸 16 回	555	＝
311	東京(八)	沖之株菊四郎	かまくら丸 15 回	49	＝
312	東京(八)	奥山繁次	かまくら丸 15 回	37	＝
313	東京(八)	沖山克巳	かまくら丸 15 回	410	＝
314	三重	大塚榮谷	さぬき丸 10 回	429	T8.2.3
315	東京(八)	尾島権次	はかた丸 13 回	489	＝
316	東京(八)	菊地喜三郎	かまくら丸 15 回	465	＝
317	長野	北山重作	かまくら丸 15 回	404	＝
318	新潟	黒石治太郎	わかさ丸 3 回	403	＝
319	長野	金野幸輔	はわい丸 16 回	322	＝
320	長野	木下東	はわい丸 16 回	538	＝
321	長野	小松敬一郎	はわい丸 16 回	485	T8.12.4
322	広島	金川祖一	はわい丸 16 回	538	＝
323	山形	今野常治	さぬき丸 17 回	224	＝
323	東京	小島徹造	さぬき丸 17 回	285	T9.1.5
324	長野	唐沢賀雄	さぬき丸 17 回	392	＝
325	長野	北澤伊代吉	かまくら丸 18 回	556	＝
326	山形	今野米吉	かまくら丸 18 回	225	＝
327	山形	今野林藏	さぬき丸 10 回	225	＝
328	東京(八)	菊池徳一	とさ丸 19 回	558	＝
329	東京(八)	菊池恭之助	とさ丸 19 回	516	＝
330	長野	加藤吉松	しあとる丸 8 回	＝	＝
331	長野	小平桑三	しあとる丸 25 回	＝	＝
332	熊本	村上幸太郎	＝	121	T6.12.1

333	和歌山	の場憲次郎	＝	＝	＝
333	和歌山	前地七郎	＝	＝	＝
334	長野	松村榮治	かわち丸 2 回	89	T6.9.1
335	長野	宮坂三治	しあとの丸 3 回	153	T6.10.25
336	熊本	守田作造	＝	120	T6.11.2
337	沖縄	玉城喜七郎	わかさ丸 5 回	200	T7.1.30
337	沖縄	松田亀助	わかさ丸 5 回	200	T7.1.30
338	沖縄	宮平勝吉	わかさ丸 5 回	255	T7.2.9
339	岡山	村田厚	わかさ丸 5 回	71	T8.2.18
340	長野	村上七郎	はわい丸 7 回	288	T7.7.26
341	新潟	武者慶五郎	はわい丸 7 回	343	T7.6.17
341	新潟	武者伊田	はわい丸 7 回	344	T7.6.17
342	愛媛	河野門松	＝	107	T6.6.18
343	長野	久保田安雄	かわち丸 2 回	90	T6.9.1
344	広島	伊藤群平	しあとの丸 3 回	145	T6.10.4
345	愛媛	亀岡亀市	＝	26	T6.10.6
346	長野	北原地價造	たこま丸 4 回	277	T7.5.13
347	沖縄	金城善吉	たこま丸 4 回	142	T6.12.11
348	沖縄	米須松	たこま丸 4 回	20	T6.12.10
349	長野	小林武治郎	わかさ丸 5 回	399	T9.6.13
350	石川	北川興三吉	わかさ丸 5 回	265	T7.2.4
400	沖縄	岸本太吉	わかさ丸 6 回	196	T7.4.8
401	沖縄	金城宇志	しあとの丸 6 回	231	T7.6.4
402	沖縄	重成安亀	はわい丸 7 回	389	T7.6.7
403	長野	倉島駒治	はわい丸 7 回	300	T7.9.2
404	長野	金子繁松	はわい丸 7 回	324	T7.9.27
405	熊本	河部門太郎	＝	134	T7.10.8
406	熊本	甲斐田久平	しあとの丸 3 回	42	T7.10.8
406	熊本	甲斐田久平	しあとの丸 3 回	44	T7.10.8
407	長野	近藤新九郎	しあとの丸 8 回	332	T7.9.23
408	長野	春日文蔵	しあとの丸 8 回	290	T7.9.17
409	福岡	栗田平一	＝	87	＝
410	熊本	北野茂平次	いつくしま丸 3 回	46	T7.11.28
411	福島	加藤助治	＝	167	T8.5.19
412	熊本	朽木菊太	いつくしま丸 3 回	160	T7.11.9
412	熊本	朽木菊太	いつくしま丸 3 回	161	T7.11.9
413	石川	角市源右エ門	さぬき丸 10 回	486	＝
414	石川	角市源次郎	さぬき丸 10 回	477	＝
415	三重	久保若松	さぬき丸 10 回	524	＝
416	長野	小出長助	さぬき丸 10 回	468	＝
417	奈良	鎌塚菊次	わかさ丸 12 回	443	T8.5.1
418	石川	加藤石松	はわい丸 11 回	520	＝
419	北海道	小松幸男	さぬき丸 14 回	212	＝
420	北海道	小松良太夫	さぬき丸 14 回	210	＝
422	長崎	米倉鳳助	かわち丸●回	423	＝
423	東京(八)	菊池福三郎	かまくら丸 15 回	487	＝
424	長野	湯沢藤平	はかた丸 9 回	304	T7.10.18
425	岐阜	佐藤宗七	しあとの丸 8 回	413	T7.10.11
426	熊本	吉野末記	ていこく丸 5 回	49	T8.2.5

427	熊本	白石米太郎	ていこく丸 6 回	132	T7.8.8
428	福島	菅山鷺造	わかさ丸●回	95	＝
428	福島	菅山鷺造	わかさ丸●回	88	＝
429	長野	島田晋	はわい丸 7 回	302	T7.8.19
430	愛媛	斉藤真平	＝	118	＝
430	愛媛	斉藤真平	＝	119	＝
431	新潟	鈴木衆蔵	はわい丸 7 回	331	T7.6.17
432	沖縄	佐久川嘉加那	はわい丸 7 回	63	T7.8.26
433	沖縄	島袋浦戸	はわい丸 7 回	37	T7.6.19
433	沖縄	島袋林牛	はわい丸 7 回	37	T7.6.19
434	沖縄	瀬長牛	しあとの丸 6 回	244	T7.8.24
435	沖縄	島袋有彦	しあとの丸 6 回	209	T7.5.4
436	長野	清水清蔵	かわち丸 23 回	32	＝
437	静岡	鈴木千代吉	わかさ丸 1 回	＝	＝
438	山形	菅井国三郎	とさ丸 19 回	405	＝
439	北海道	杉ノ下茂	とさ丸 19 回	85	＝
450	北海道	杉之下伸吉	とさ丸 19 回	438	＝
451	秋田	佐々木三太郎	かまくら丸 18 回	185	＝
452	長野	藍川常蔵	かまくら丸 18 回	431	＝
453	東京(八)	佐々木満次	さぬき丸 17 回	395	＝
454	長野	園原千鶴	さぬき丸 17 回	407	＝
455	長野	島岡幸一	はわい丸 16 回	545	＝
455	広島	迫田嘉六	はわい丸 16 回	478	＝
456	熊本	坂本久蔵	かまくら丸 15 回	202	＝
457	長野	下平與茂太郎	かまくら丸 15 回	542	＝
458	東京(八)	佐々木治作	かまくら丸 15 回	497	＝
459	北海道	柴田竹次郎	さぬき丸 14 回	358	T9.2.16
459	北海道	柴田竹次郎	さぬき丸 14 回	359	T9.2.16
460	東京(八)	佐々木福助	かまくら丸 15 回	35	＝
461	茨城	清水勝	さぬき丸 14 回	＝	＝
462	東京	佐々木春作	さぬき丸 14 回	461	＝
463	東京(八)	佐々木徳蔵	はかた丸 13 回	401	＝
464	石川	関戸政左衛門	さぬき丸 10 回	436	T7.11.23
465	奈良	島田實三	はかた丸 13 回	170	T8.4.22
466	石川	清丸耕摩	さぬき丸 10 回	475	＝
467	福島	佐久間喜市	●●丸 6 回	92	T7.11.9
468	福島	菅野勝見	＝	108	T7.11.9
469	長野	島田鶴雄	はかた丸 9 回	297	T7.10.3
470	岐阜	鷺見虎造	しあとの丸 8 回	418	T7.10.16
471	石川	阪野幸太郎	わかさ丸 5 回	266	T7.2.12
472	鹿児島	鮫島満次郎	いつくしま丸 3 回	125	T7.8.12
473	広島	住川米蔵	しあとの丸 3 回	47	T6.10.16
474	沖縄	識名盛光	しあとの丸 3 回	112	T6.10.2
475	熊本	重元又喜	＝	27	T6.7.10
476	長野	六川佐平	わかさ丸 5 回	67	T7.3.10
477	千葉	押本瀧輔	しかご丸 28 回	154	＝
478	n/a	Pedro M. Oliveira	＝	24	T6.9.17
479	岐阜	大坪治助	さぬき丸 14 回	＝	＝
480	東京	大沼與慶	とさ丸 19 回	64	T9.7.5

481	東京(八)	奥山福平	とさ丸 19 回	＝	T9.7.10
482	東京	大澤為吉	とさ丸 19 回	549	＝
483	東京(八)	田代栄三	とさ丸 19 回	239	＝
484	北海道	土田良一	とさ丸 19 回	448	＝
485	高知	津野和太郎	とさ丸 19 回	192	＝
486	東京(八)	玉置熊一	とさ丸 19 回	560	＝
487	東京(八)	田村萬三郎	とさ丸 19 回	455	＝
488	島根	寺戸開市	とさ丸 19 回	414	＝
489	新潟	田村輝一	とさ丸 19 回	440	＝
490	沖縄	上原清輝	はわい丸 7 回	395	T7.6.7
500	長野	内田登始雄	はわい丸 7 回	17	T7.9.26
501	鹿児島	鳥越勘太郎	かわち丸 20 回	335	＝
502	長野	海野昶弥	しあとる丸 8 回	336	T7.9.12
503	熊本	内村豊喜	＝	128	T7.7.17
504	広島	若狭八百藏	さぬき丸 14 回	339	＝
505	長野	和田陸清	しあとる丸 8 回	366	T7.9.16
506	岡山	渡辺常太郎	わかさ丸 5 回	246	T7.1.28
507	福島	渡辺亀藏	＝	102	T6.10.17
507	福島	渡辺亀藏	＝	110	T6.10.17
507	福島	渡辺亀藏	＝	104	T7.11.9
508	長野	牛腰今朝男	はわい丸 16 回	294	＝
509	北海道	内野正次	さぬき丸 14 回	503	＝
510	長野	植木吉左衛門	さぬき丸 14 回	309	＝
511	北海道	内野正好	わかさ丸 12 回	502	T8.5.10
512	香川	臼杵佐平	しあとる丸 8 回	255	＝
513	山口	善本元一	＝	97	T5.11.12
513	山口	善本元一	＝	19	T7.6.4
514	石川	和佐田幸次郎	しかご丸 28 回	259	＝
515	新潟	渡辺興助	かまくら丸 15 回	347	＝
516	山口	善村福一	ふしみ丸 1 回	78	＝
517	山口	善本定	ふしみ丸 1 回	74	＝
518	山口	善本一義	＝	AL	＝
519	長野	山室滋治	かわち丸 2 回	176	T7.5.18
520	北海道	山本五一郎	さぬき丸 14 回	289	＝
521	長野	吉川喜之作	さぬき丸 14 回	274	＝
522	東京(八)	山川啓次郎	はわい丸 13 回	474	＝
523	石川	山下治作	さぬき丸 10 回	61	T8.3.27
524	愛媛	矢野林之助	わかさ丸●回	135	＝
525	福井	山口新助	＝	177	T7.11.16
526	沖縄	当間三郎	はわい丸 7 回	80	T7.6.14
527	長野	土屋武雄	はわい丸 7 回	308	T7.6.27
528	沖縄	玉城淳	はわい丸 7 回	385	T7.6.17
529	長野	高野右一郎	はわい丸 7 回	313	T7.6.27
530	愛知	田中喜好	はわい丸 7 回	356	T7.7.16
531	愛知	角田由三郎	はわい丸 7 回	352	T7.7.16
531	熊本	田中清	＝	130	T7.7.17
532	熊本	高浜八太郎	うんかい丸 4 回	50	T7.10.8
532	熊本	高浜八太郎	うんかい丸 4 回	52	T7.10.8
533	沖縄	澤岬安序	たこま丸 4 回	230	T6.12.13

534	熊本	竹下市太郎	＝	216	T7.3.19
535	石川	田中吉四郎	しあとる丸 3 回	151	T6.9.27
536	広島	高田寅一	ていこく丸 5 回	81	T6.6.15
537	福岡	別府力太	ていこく丸 6 回	＝	＝
538	和歌山	白石多次郎	しかご丸 28 回	146	＝
539	長野	高野実	はわい丸 7 回	364	T7.8.3
540	長野	高井多賀次	さぬき丸 10 回	299	T7.11.24
541	福岡	為廣熊太郎	＝	249	T7.12.7
542	福島	高野喜平	＝	106	T7.11.9
543	長野	手塚多市	しあとる丸 8 回	341	T7.9.23
544	沖縄	富濱宗盛	わかさ丸 5 回	154	T7.3.14
545	岐阜	田中亮三	わかさ丸 5 回	199	T7.3.22
546	沖縄	多和田眞次良	わかさ丸 5 回	262	T7.1.9
547	沖縄	高里盛信	わかさ丸 5 回	169	T7.1.31
548	静岡	田代茂三郎	わかさ丸 1 回	220	T7.10.21
548	静岡	田代茂三郎	わかさ丸 1 回	221	T7.10.21
549	＝	Thiago J.Felippe	＝	23	T6.10.22
550	＝	水本仁太郎	＝	＝	＝
551	北海道	玉田光春	わかさ丸 12 回	512	T8.4.24
552	北海道	玉置正三	わかさ丸 12 回	444	T8.5.1
552	北海道	玉置正三	わかさ丸 12 回	450	T8.5.1
552	北海道	玉置正三	わかさ丸 12 回	456	T8.5.1
553	広島	田尾捨造	わかさ丸 12 回	36	T8.2.19
555	長野	田中孫太郎	さぬき丸 14 回	276	＝
556	長野	寶臣勝	さぬき丸 14 回	272	＝
557	岐阜	田中登	さぬき丸 14 回	21	＝
558	北海道	玉置富五郎	わかさ丸 12 回	450	＝
559	北海道	玉置里見	わかさ丸 12 回	452	＝
560	長野	田仲益雄	さぬき丸 14 回	388	＝
561	長野	田中甲子龟	さぬき丸 14 回	377	＝
562	北海道	外山順作	さぬき丸 14 回	345	＝
564	北海道	高駒次郎	かまくら丸 15 回	276	＝
565	東京	原梅三郎	＝	＝	＝
566	北海道	武田廣	かまくら丸 15 回	161	＝
567	北海道	寺島安之輔	かまくら丸 15 回	197	＝
568	新潟	竹前徳三郎	かまくら丸 15 回	338	＝
569	長野	戸田●一郎	かまくら丸 15 回	536	＝
570	北海道	玉田藤太郎	さぬき丸 14 回	508	＝
571	北海道	高桑栄藏	さぬき丸 14 回	36	＝
572	東京(小)	高橋八郎	はわい丸 16 回	459	＝
573	東京(小)	谷口玉之助	はわい丸 16 回	493	＝
574	石川	柳橋弥作	わかさ丸 5 回	268	T7.2.5
575	石川	山岸又助	しあとる丸 3 回	147	T6.9.27
576	長野	湯澤藤平	はかた丸 9 回	＝	＝
578	北海道	山崎寅平	とさ丸 19 回	126	＝
579	新潟	山崎堯	とさ丸 19 回	439	＝
580	広島	山本肇	はわい丸 16 回	543	＝
581	新潟	横井留吉	かまくら丸 15 回	346	＝
582	北海道	吉良儀平	さぬき丸 14 回	525	＝

583	福島	高野留七	＝	＝	＝
584	長野	吉川司馬藏	かまくら丸 15 回	409	＝
584	長野	吉川司馬藏	かまくら丸 15 回	411	＝
584	東京 (大)	山田政次郎	かまくら丸 15 回	557	＝
585	和歌山	山中三五郎	かわち丸 23 回	311	＝
586	岡山	松本五一郎	＝	＝	＝
587	長野	平田和藤次	＝	＝	＝
588	広島	岡田勘一	＝	541	＝
589	福岡	前川一藏	＝	＝	＝
590	鹿児島	吉本禎一	＝	＝	＝
591	熊本	堀勝	＝	＝	＝
592	岡山	河内長四郎	＝	＝	＝
593	愛知	渡辺和佐太郎	＝	＝	＝
594	長野	座光寺與市	さぬき丸 14 回	376	＝
596	長野	吉原喜太郎	はかた丸 9 回	318	T7.10.3
597	長野	柳澤嘉四郎	はかた丸 9 回	427	T7.10.26
598	兵庫	安田巖	＝	217	＝
599	愛知	山田鶴一	はわい丸 7 回	357	T7.7.16
600	長野	横谷久	はわい丸 7 回	333	T7.8.20
601	沖縄	屋比久孟	はわい丸 7 回	245	T7.6.11
602	長野	山寺融	はわい丸 7 回	400	T7.6.13
603	沖縄	山城蒲吉	はわい丸 7 回	369	T7.7.2
604	沖縄	屋富祖次郎	わかざ丸 5 回	193	T7.1.20

* BL = セッテ・バラス植民地、AL = アリアンサ植民地

* 東京 (大) = 伊豆大島、東京 (小) = 小笠原、
東京 (八) = 八丈島

* 〇 = 空白、● = 判読不明

注

¹ 昭和期に計画的な自作農移住地が増えたことも手伝って、1938 年までには自作農が日系人の過半数を占める。しかし、イグアッペ郡の植民地が開かれたのは 1910 年代初頭であり、この時期としては突出した動きであったといえよう。

² 旧イグアッペ郡の植民地のうち、レジストロは、金を積み出す船の課税「登録」が語源であり、セッテ・バラスは「七つの金の延べ棒」が語源である。これらの地名は往年の金鉱業との関係をしのばせる。

³ 昌和氏所有の「戸籍簿」はオリジナルではなく、破損の激しい頁を台紙に貼り付けたうえで全てをゼロックス複写して綴じたも

のである。頁番号の脱落がこの補修作業で生じたものなのか、あるいは原簿からのものなのか判然としない。脱落頁は次のとおりである。2、13、21、81、82、160-199、249、281-299、351-399、421、491-499、595 の各頁。

参考文献一覧

第 35 回移殖民図南倶楽部『ブラジル渡航記念 図南』(松村栄治資料 102-2、国立国会図書館憲政資料室)、1924。

東京シンデケート『伯刺西爾開拓目論見書』橋田正男関係資料 96-5、国立国会図書館憲政資料室(電子展示会「ブラジル移民の 100 年」) n. d。

深沢正雪「日本移殖民の原点探る—レジストロ地方入植百周年」、連載全 127 回、『ニッケイ新聞』2013 年 6 月 22 日～2014 年 2 月 18 日。

ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会『ブラジルに於ける日本人発展史』下巻(『日系移民資料集』南米編第 30 巻<昭和戦前期編 2>、日本図書センター、1990 年に再録)、1943。

ブラジル日系人実態調査委員会『ブラジルの日本移民』記述編、東京大学出版会、1964。

ブラジル日本移民百年史編纂委員会『目でみるブラジル日本移民の百年』(ブラジル日本移民百年史別巻)、風響社、2008。

ブラジル日本移民資料館『写真集 戦前活躍した移民船』、ブラジル日本文化福祉協会、2011。

レジストロ六十年史刊行委員会『レジストロ(植民地)の六十年』、レジストロ六十年史刊行委員会、1978。

安中末次郎『海外興業株式会社経営伯刺西爾国イグアッペ植民地創立廿週年記念写真帖—1913-1933』、安中末次郎、1934。